温 故 知 新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介（61）　平成 14 年 12 月 15 日

江戸時代の国学（その３）

『語意考』(811/39)

賀茂真淵（元禄 10(1697)年～明和６(1769)年）の学問は、古言－古意－古道という形を取っています。その方法を体系化してまとめたのが、五意考と総称される著作です。『文意考』は文章論を中心にしたもの、『歌意考』は和歌の本質や理想、古風古学の意義などの歌論、『国意考』は古道を説いた思想書、『書意考』は『日本書紀』を中心に古学の方法を説いています。そして、最後に『語意考』で、学問体系の根底にある言語の学についてまとめています。

『語意考』(811/39)は、総説、活用論、語義の説明という３つの部分からなっています。まず、総説では日本、中国、インドを対比し、日本は人の心が素直であるので、事も少なく、したがって言も少なく、だから「天地自然」の五十音で足りると論じています。

活用論では、五十音表を示し、アの段を「はじめのことば(初言)」、イの段を「うごかぬことば(体言)」、ウの段を「うごくことば(用言)」、エの段を「おふすることば(令言)」、オの段を「たすくることば（助言)」として意義付けています。例えば、イの段「キシチニヒミイリヰ」は、「冠」「扇」のように名詞の形に定まる場合の音である、それに対してウの段「クスツヌフムユルウ」は、「(か)かぶる」「あふぐ」はその物の動きをいう場合に用い、述語として作用すると説明しています。

語義としては、延言(一言を延ばして二言とする)、約言 (二言をつづめて一言とする)、転回通、略言をあげています。例えば、淡海はもと「あはうみ」で「は」と「う」をつづめて「ふ」となるゆえ「あふみ」と、さらに遠江は「とほつあはうみ」のことで、「つ」と「あ」をつづめて「た」となり「とほたふみ」と書くと説明しています。また、月の呼称には略言によるものが多く、例えば、６月を「みな月」というが、これは「かみなり月」の略であり、逆に 10 月は雷が鳴らないので「かみ無月」であると説明しています。

この『語意考』は、寛政元(1789)年に本居宣長の序をつけて出版されており、その識語により真淵が没した明和６(1769)年の２月に完成したとされています。当館所蔵は、この寛政元年の初版本です。ただし、稿本自体は、それ以前に成立し、何回も書き直されたり、写しが作られたもののようです。

国語の語法研究は、後に本居宣長らによって飛躍的な進展を遂げますが、中世的な伝統から脱して近代的な科学への過渡期の産物である『語意考』の歴史的な意義は大きいものです。

『語意考』五十音表

(参考文献)

『賀茂真淵全集　第 19 巻』(S080/8)
平・阿部校注『近世神道論 前期国学』(日本思想体系 39)(121.08/100)
寺田泰政『賀茂真淵の話』(S120/13)